

I.:O.:S.:魔術トラクト

T M O 2

カバラの呪歌



THE OFFICIAL ORGAN
OF
I.:O.:S.:

PUBLICATION IN CLASSES C~D
IMPRIMATUR : M FRATER I.:O.:S.:

First published 2008 by I.:O.:S.:

This Edition online ver.1.1, 2010.

All rights reserved. Copyright © 2008, 2010 by Tzutom Akibba, I.:O.:S.:

1 概要

カバラの呪歌はゲルシオン・ウィンクラーらの複数の学者たちの最新の研究を元に構成した。

ユダヤ教とシャーマニズムとでは相性が悪いように感じるかもしれないが、シャーマニズム的な要素はカバラのなかに散りばめられている。

特に、呪歌（シャント）については、古くからの伝承と矛盾するものではない。ブラツラブのラビ・ナフマンが説いた宇宙の主の瞑想において、リボノ・シェル・オラームをリボイノイ・シェル・オイロームと抑揚をつけて詠唱したことを思い出してもらいたい。⁽¹⁾

ここから、さらに一步踏み出したところにシャントの技法がある。

2 呪歌の構成

(1) 呪歌の起源

ここに紹介する技法は、聖名をシャーマニックに詠唱する呪歌（シャント）の技法である。太古の神官は、聖名を旋律をつけて唱えた。ヘブル語の神聖名は、文字として書かれた場合でも声に出して唱えるのと同等の効力を発する。しかし、発音と韻律を正しく用いると特別な効果が生じる。元来、霊的領域と物質的領域は同じリアリティを共有しており、ただ「幻影の帳」（パルガド פַּלְגֵּי הַאֵשׁ）が両者を隔てる（Z II 255b）のみである。正しい聖名の発音と韻律は、その帳を貫く叫びとなる。

『マナセの祈り』に曰く「神は深淵を閉じ、力強く誉れある自らの名で封印した」⁽²⁾

カバラの伝承においても、聖名を反復するシャントの技法は古くから用いられていた。

単語や歌を反復する技法をハーガー חֲגָגָה（複数形 ハーギョース חֲגָגוֹת）と言う。ハーガーは小さな声で呟きながら瞑想することも指す。

『大へハロース』においては、玉座の前に到達するため特定の名前を120回唱えよと指導された。サフェドのカバラ集団は、聖書の章句を繰り返し唱え、その知的な意味が浸透し、心の一点を貫くまで反復した。その技法はゲルシンと呼ばれた。⁽³⁾ インドのタントラにおいて、ジャパという聖語反復技法がある。何万回と唱えるジャパ技法と比較すると、カバラは長い章句を使用することもあり、ゲルシン技法の方が現実的かつ実践的である。

イサク・ルーリアは聖書の章句を、その言葉自体が肉体化し語りかけてくるまで反復した。ゲルシン技法を発展させたのはヨセフ・カロである。かれは『ミシュナー』の章句を、霊体化して術者に指導を与えるまで成長させた。⁽⁴⁾

一方、ヘブル語においてシーラー שִׁירָה（複数形シーロース שִׁירָהִים）とは、シャントを意味する言葉である。『申命記』第31章にあるとおり、ユダヤの民がおりに触れ歌うようにと主が定めた歌のことである。ユダヤ人たちは、かたちを変えながらシャントを継承している。

歌手ポール・ロブソンがレビ・イツァクのハシディック・シャント「汝らに良き日を、宇宙の主（リボイノイ・シェル・オイローム）よ、われサラの息子、・・・」を米国で再演したのは1958年のことであった。⁽⁵⁾

米国の再構成派に属するラビ・シェファール・ゴールドは、シナゴグで歌われてきた定型化し、形骸化したシャントではなく、恍惚と神秘体験を誘引するユダヤ的シャントを教えている。彼女

(1) Aryeh Kaplan, *Jewish Meditation*, New York : Schocken Books, 1985, pp.22, 57f.

(2) The Player of Manasseh, in *The Old Testament Pseudepigrapha*, New York : Doubleday, 1985, p.634.

(3) Kaplan, op. cit., p.56.

(4) Perle Besserman, *The SHAMBHALA GUIDE to Kabbalah and Jewish Mysticism*, Boston : SHAMBHALA, 1997, p.32.

(5) Jonathan D. Karp, "Performing Black-Jewish Symbiosis : The Hassidic Chant of Paul Robeson", in *American Jewish History*, Vol.91, No.1, Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 2003, pp.53-81.

は、シャントの恍惚体験は、全き献身による観想的空間への移行を可能にすると説明した。観想的沈黙の文脈のなかにおいてシャントの力が深化し、発展するための空間が作り出される。

彼女は、シャントを「あふれる盃」（**כוס־לְבַבָּא**）（『詩編』23章5）と言う。そして、あふれる盃には2種あり、シャントを唱える者たちのなかに生成される。

第1の盃は、各人の心臓の上にある内的な盃であり、その盃には生命と愛の源泉から途切れることのない流れが注ぎ込まれ、あふれ出る。シャントは、その流れと自分自身を再結合する。

第2の盃は、シャントを唱える集団のなかに生成される。唱和するシャントの音と、注意力の共有が盃を生む。その盃には神聖な流れが注ぎ込んでおり、集団に属する誰でも盃からあふれる神聖な流れに触れることができる。⁽⁶⁾



聖四文字の文字を分解して使われるシャント及びヘブル語の各文字を連唱するシャントは各所で用いられている。⁽⁷⁾

カバラ的なシャントの一部を紹介しよう。

「ヒー・ネイ・ニー（**הי ניי ניי** われはここに）」という単語は、意識の集中カヴァナーに用いられる。燃える柴のなかから主が「モーシェ、モーシェよ」と呼ばれたとき「ヒー・ネイ・ニー」と預言者モーシェは答えた。（『出エジプト記』3：4）その意味は何か。かれは物理的にその場にいた。感情的には準備ができていた。霊的には神聖なるものに対して開かれていた。

ヒー・ネイ・ニーとは、存在の中心的状态であり、それは肉体、精神、霊が「ここ」にあり、霊的な接続の可能性に対して開かれていることを意味する。⁽⁸⁾

「ヒー・ネイ・ニー」は、ヨム・キプール等の特別なユダヤ人の祭で使われる祈祷文の名前でもある。⁽⁹⁾ 3章のシャントを実践する際には、上記の祈祷文の発音を重視して「ヒー・ネイ・ニー（**הי ניי ניי**）」という風に綴りも変えてある（他のシャントの章句においても、通常のヘブル語文法に従っていない場合がある。）。

一方、アニ（**אני** われ）という単語は、文字の配列を変えるとアイン（**אין** 無）となる。⁽¹⁰⁾ われが無になるとき神は顕れる。これにボフ（**בו** 虚空）（『創世記』1：2）という単語を組み合わせ「アーニー・ボー（**אני בו** われと名前なきもの）」というシャントの章句が生まれる。

『聖四文字の呼吸』（TM01）で述べたように、マギド・ダブ・ラブ・ヤーコブは「無」と「神性」との「間にあるもの（in-between）」に集中することが、「アイン体験」を得る手段であると示した。物理的世界の「有」のなかを動きながら、心臓に「無」を保持するわれこそが、境界を歩く者となる。⁽¹¹⁾

(6) Rabbi Shefa Gold, "That This Song May Be a Witness : The Power of Chant", in *Meditation from the Heart of Judaism*, Woodstock : Jewish Lights Publishing, 1997, p.135.

(7) 一例として、Joseph Naveh&Shaul Shaked, *Amulets and Magic Bowls : Alamaic Incantations of Late Antiquity*, Jerusalem : The Magnes Press, 1998, pp.44-49.

(8) Man Fink Gefen, *Discovering Jewish Meditation : Instruction & Guidance for learning an ancient spiritual practice*, Woodstock : jewish Lights Publishing, 2000, pp.81ff.

(9) Sorel Goldberg Loeb & Barbara Binder Kadden, *Teaching Torah : A Treasury of Insights and Activities*, Denver : A.R.E. Publishing, 1997, p.62.

(10) Perle Besserman, *Kabbalah and Jewish Mysticism*, Boston : Shambhala, Publication, 1997, p.43.

(11) Avram Davis, *The Way of Flame : A Guide to the Forgotten Mystical Tradition of Jewish Meditation*, Woodstock : Jewish Lights Publishing, 1999, pp.26f.

(2) ショーファー

角笛（ショーファー）の朗々たる響きとシャントは、この幻影の帳を開き霊的領域にアクセスする技術的な鍵となる。ショーファーは古代から現代にまで用いられている唯一の儀式用楽器である。歴史的には当初軍事目的で使用されていたが、聖書時代では祭祀の楽器となり、『ミシュナー』によると神殿では2種類のショーファーが使用されていた。

第1は山羊の角を使用したもので黄金の鈴の装飾を施され、7月1日（ロシュ・ハシャナー）とヨベルの日に吹き鳴らされた。ロシュ・ハシャナーは聖書では「ラッパの記念日（ジクロン・テルアー） זְכֹרֹן תְּרֻעָה」（『レビ記』23章24）または「ラッパの日（ヨム・テルアー） יוֹם תְּרֻעָה」（『民数記』29章1）と描写される。テルアーは吹鳴するというヘブル語である。

第2は雄羊の角を使用したもので銀の装飾を施され、日の最初に吹き鳴らされた。

また、ショーファーは放浪時代にカハルやシナゴグの集会の開催を知らせるために吹かれた。ショーファーには魔術的な象徴が付与されている。イエリコの城壁を倒壊させたのはショーファーの吹鳴であった。

『死海写本』によると、戦争の間に間断なくショーファーが鳴り響き、敵の心臓に恐怖を送り込む。その間に祭司たちは、6本の殺戮のラッパを吹き鳴らしている。また、干魃の年には雨乞いのショーファーが吹かれた。

ショーファーには、百の調べ（テキオート טְכִיעוֹת）があると言われるが、その中で四つ（最初の三つのみ数える場合もある。）の特別な調べがある。

第一はテキアー תְּקִיעָה であり、高低の少ない深い吹鳴であり約3秒間連続して唐突に終わる。これは抵抗の音、嘆息の響き（コル・アナカー קוֹל אֲנָחָה）である。

第二はシェヴァリム שְׁבָרִים であり、約1秒間の高音階に上昇する吹鳴であり、三つの短音から構成される。これは抵抗の音を粉碎する音節の響き（コル・ハバラー קוֹל הַבָּרָה）とも呼ばれる。⁽¹²⁾

第三はテルアー תְּרֻעָה であり、約3秒間の短い吹鳴、9個以上を連奏するスタッカートとなる。

第四はテキアー・ゲドラー גְּדוּלָה תְּקִיעָה（大テキアー）であり、力の続く限り、最低でも10秒間は継続する切れ目のない（最後の）吹鳴である。

これを目的により組み合わせて、吹奏するのである。

カバラの伝承においては、ショーファーを吹き鳴らす様々な理由が考えられた。

ロシュ・ハシャナーでは、ショーファーの吹鳴が終わった直後に聖書の章句が詠まれる。「テルアーの響きを知る者は幸いなるかな。主よ、かれらは汝のみ顔の光のなかを歩む。」（『詩篇』89章15）

バアル・シェム・トブは、上記を評して「霊的活動の大要は悲しみに打ち拉がれることにある。霊的な奉仕の完璧な私たちは（神とともに）身を低くして歩くことだ。テルアーを知る民は幸いなるかな。喜びの叫びを知る民は幸いなるかな。乖離した存在（自我）の肥大した感覚を打ち砕く民は幸いなるかな。内向きには、その心臓は砕かれたり、しかし、外向きには、真なる神の召使いに値すべき喜びに溢れている。」と語った。



(12) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary : Recovering the Shamanic in Judaism*, Berkeley : North Atlantic Books, 2003, p.135.

ハシディズムの解釈によれば、「主への喜びの叫び（הַרְיָנוּ לַיהוָה）がすべての大地に」（『詩篇』98章4）とは、人が物質的存在から離れて、自らの地に属する感覚すべてを破棄することを意味する。従って、ロシュ・ハシヤナーの日に吹鳴されるショーファーの調べは、長音が唐突に断絶するテキアーから、複数の短音の連鎖であるシェヴァリムに移行し、シェヴァリムを三つの寸断するテルアーで終わるのである。

テルアーを知ることは、喜びのうちに叫ぶ内的な意味を知ることである。内方への破壊は、目に映る喜びを内包し、身を低くして歩むことを映し出す。

そして、神の内なる光の顕現を受容する容器は、砕かれた心臓である。肥大した自我を打ち砕いてこそ、超越せる神 ה' הוּא ハヴァヤーのもとに身を低く歩みよることができる。⁽¹³⁾

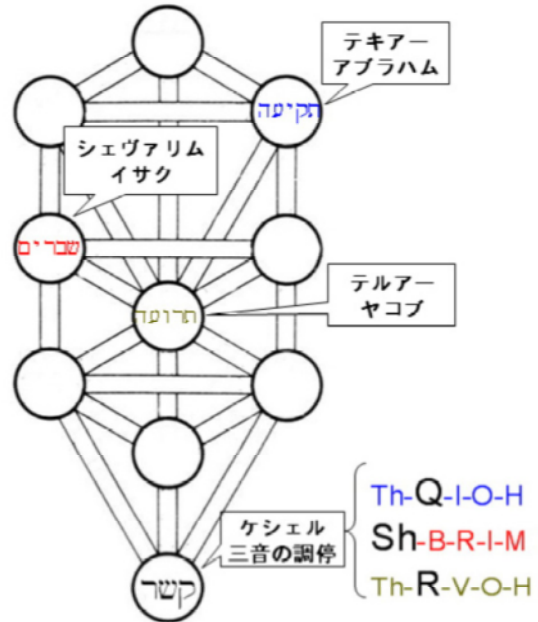
一方、『ゾーハルの書』において「知る」という言葉は、「秘教的知識」に関連づけられている。ショーファーは、人間の気管や食道の周囲の肉体の霊的な部分に該当する。ショーファーの響きは高次の慈悲（ラハミム）を呼び覚ます

人間が神聖なる領域に達したとき言葉で表現できない真実の思いを叫びで表現する。ショーファーの吹鳴とともに、心の深みから発する単純な言葉なき声を出すのである。⁽¹⁴⁾

ベルディチェフのラビ・レビ・イツァクは、律法の学習の際に視覚化（visualization）と聴覚化（audibilization）とを併用することを勧めた。そして、その際にショーファーの聴覚化を推奨した。⁽¹⁵⁾ あたかも、その場でショーファーが吹鳴されたかのように、全身で音を聞くのである。

さて、右上図はショーファーの旋律を生命の木に当てはめたものである。

テキアーはアブラハムに帰属し、従ってケセドにある。シェヴァリムはイサクに帰属し、ゲブラーにある。テルアーは、ヤコブに帰属し、ティファレトにある。そして、マルクトにはこれら3音を調停するケシエルがある。ケシエル（Q-S h-R）は、テキアー（Q）、シェヴァリム（Sh）、そしてテルアー（R）の略語として、吹奏順序を示すこともできる。つまり、Q S h R Q、Q S h Q、Q R Q などのようにである。⁽¹⁶⁾



(13) <http://www.inner.org/times/tishrei/tishrei59.htm>

(14) Joseph Dan, *The Teachings of Hasidism*, West Orange : Behrman House, 1983, p.131.

(15) Yitzhak Buxbaum, *Jewish Spiritual Practices*, London : Jason Aronson, 1990, pp.424f.

(16) Dr.Philip S.Berg, *The Zohar Parashat Pinhas Vol.III*, New York : Research Centre of Kabbalah, 1987, p.51.

3 呪歌の実践

(1) 四風の聖化

四風の聖化は、神殿のアストラルライトに四方の風を召喚する際の技法である。

東を向いて宣言する。

「神殿に四方の風を召喚せん。」

神殿の東壁の中央に扉を視覚化する。

東に向い高らかにヘブル語を詠唱し、四方の風をふるわせる呪歌とする。

「エロウイイー

(**אֵלַי** わが力の根元よ。)

ネシャマー・シェー・ナタフター・ビー

(**בִּי נְשָׁמָה שׁוֹאֵה נְאוּתָהוּת בִּי** 汝が授けし息吹よ。)⁽¹⁷⁾

テホラー・ヒー

(**הִי טָהוּרָה** そは清浄なり。)

アター・バラター

(**אַתָּה בְּרָאָתָהּ** 汝がそを創造せり。)

アター・ヤツアルター

(**אַתָּה יָצַרְתָּהּ** 汝がそを形成せり。)

アター・ネファクター・ビー

(**אַתָּה נִפְחָתָהּ בִּי** 汝はそを我に吹き寄せる。)

ヴェ・アター・メシヤムラー・ブキルビー

(**וְאַתָּה מְשַׁמְרֵת בְּקֶרֶן** また、汝は我がうちにあるそを監視する。)

ヴェ・アター・アティード・リット・ラー・ム・メフニイー

(**וְאַתָּה אֶמְד לִּי לֹא מִמִּפְנֵי** また、汝はいつかそを我より取上げる。)」

「バラフター・ヴェ・ヤツアルター (**וְיָצַרְתָּהּ בְּרָאָתָהּ** 創造と形成)」

東の方向に宝瓶宮のサインを描く。

「ヒー・ネイ・ニー (**הִנֵּה הִנֵּה** われはここに)

ヒー・ネイ・ニー (**הִנֵּה הִנֵּה** われはここに)

ヒー・ネイ・アーニー・ヤー (**הִנֵּה אֲנִי יָהּ** われはここに、神の息吹の)

アナ・ホウシーアー (**אֲנִי הוֹשֵׁעַ** 加護のあらんことを)」

「ヤー・アナ・ホウシーアー (**אֲנִי הוֹשֵׁעַ** 息吹の加護あらんこと)」

ヨド・ヘーの呼吸を行う。

「ヨー」(呼気)「ヘー」(吸気)「ベーリー・マー」(無の性質を強く意識する。)

(17) 来る (**בוא**) の変化形 (**בי**) は、「霊が我がうちに入りたり (**בִּי רִוַח**)」(『エゼキエル書』2:2) のように使われる。

東の壁いっぱいに、黄色い照り返しを浴びた雲海がひろがる。雲海は下から湧きあがる雲の断片で沸騰するようだ。

その黄色い雲の渦の中心に、仄かな薄暗い陰が生まれる。

その陰は人型をつくる。人型の頭部が紫色の光を放つ。

これはエロヒムの影だ。

祭壇の南に回り、南の方向に獅子宮のサインを描く。

「アーニー・ボー (אֶנִי בּוֹר われと名前なきもの)

アーニー・ボー (אֶנִי בּוֹר われと名前なきもの)

エロヘイ・イスラーエル (אֱלֹהֵי יִשְׂרָאֵל 主の力よ)」

南の壁いっぱいに、紅蓮の炎が燃えさかる。

爆発的な溶岩の噴出、燃え上がる硫黄の噴煙を炎の陰に垣間見る。その炎の壁のただなかに、巨大なたてがみのある生き物が見える。強靱な爪のある筋肉の束が炎を掻き分ける。

それは獅子のすがたをもつ炎である。

祭壇の西に回り、西の方向に天蠍宮のサインを描く。

「アーニー・ボー (אֶנִי בּוֹר われと名前なきもの)

アーニー・ボー (אֶנִי בּוֹר われと名前なきもの)

ホゥシーアナ (הוּשִׁיאָנָה われを助けよ)」

ヴァウ・ヘーの呼吸を行う。

「ヴァウ」(呼吸)「ヘー」(吸気)「マー」(有の性質を強く意識する。)

西の壁いっぱいに、ブルー・オーシャンがひろがる。

それは砂浜近くの明るい海水ではなく、海底の伺えない深海の青黒い海原である。小島ほどもある巨大なうねりが押し寄せてくる。

その大うねりの海水の表面に、途方もなく巨大な翼ある生き物の影が映る。

それは鷲の翼のようである。

祭壇の北に回り、北の方向に金牛宮のサインを描く。

「アーニー・ボー (אֶנִי בּוֹר われと名前なきもの)

アーニー・ボー (אֶנִי בּוֹר われと名前なきもの)

エレツ・カーナーニー (אֶרֶץ כְּנַעַן カナンの地よ)」

北の壁いっぱいに、乾いた大地がひろがっている。

地平線の彼方には、雲をまといつかせた山脈が遠望できる。

彼方の雪の峰から手前にかけては、なだらかな丘陵地帯になっており、その丘の上に角のある生き物の影が射す。

生き物は牡牛のように見える。

祭壇の東に回り、東面する。

儀式用の長大な角笛を取り出す。

「コル・アナカー・ヴェ・テキアー (קוֹל אֲנָחָה וְתִקְיעָה)」

角笛を口にあて、一息で続く長々音(テキアー)を鳴り響かせる。

「 _____ 」

「コル・ハバラー・ヴェ・シェヴァリム (קול הברה ושברים) 」
角笛を口にあて、三つの短音 (シェヴァリム) を鳴り響かせる。

「 — — — 」

「コル・テルアー (קול תרועה) 」

角笛を口にあて、九つの短音を連続して吹鳴するテルアーを鳴り響かせる。これは角笛の司牧の響きと呼ばれる。

「 ————— ————— ————— 」

角笛の響きとともに四方位の壁が融解した。矩形の神殿の広間が半球状の空間に変貌した。

高らかに次を唄う。

「リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー・シャーディー
(לִישׁ אַחִיָּה קְבוּץ שְׂדֵי 汝が導きにわが望みを主よ)

キー・ビー・ティー・シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー
(לִישׁ אַחִיָּה קְבוּץ שְׂדֵי 我が望みを主の導かれるままに)

シャーディー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・ティー
(קְבוּץ שְׂדֵי לִישׁ אַחִיָּה 主の導きに我が望みを) 」

「サティームー・ヴェ・グー・リィアー (סְתִימ וְגִלְיָא) 隠され開示されたり。」

聖化した四方位の風により、神殿の広間において完全に無垢の身となる。



(2) ヒーリング

心身に不調を覚えたときに行う儀式である。

もちろん、40度の熱を出しているときに行うのは愚の骨頂であり、速やかに医者にかかることをお勧めする。軽微な病や、軽い慢性疾患などの場合に、医師による治療と並行して行うのが適当である。

「太母神エロヒームよ、世界の創造主よ。

われは自らを癒すすべを知りたし。

わが手により、心身のバランスを正さんと願うものなり。」

「リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・シイー・ヤー

(יה לייש אחיה קבוצ יח 汝が導きこそわが望み、万物に恵みを)

キー・ビー・シイー・ヤー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー

(יה לייש אחיה קבוצ יח わが望み、万物に恵みを、汝の導かれるままに。)

ヤー・リー・イエー・シュー・アッ・チャー・キー・ビー・シイー

(יה לייש אחיה קבוצ יח 万物に恵みを、汝の導きに我が望みを。)」

上記の呪歌を3回反復する。

水のなかに両手を浸し、その後、空に向かい高く両手をあげる。両手から水が滴る。

「われは癒しの望みを空に向かい高くあげる。

あたかも立ち上る霧が雲となり雨を降らすごとく、癒しの雨が我が身を打つ」

「アナ・ホウー・シー・アナ (אנה הו שע אנה 祈願す、われを助けよ)

アナ・ホウー・シー・アナ (אנה הו שע אנה 祈願す、われを助けよ)

アナ・ホウー・シー・アナ (אנה הו שע אנה 祈願す、われを助けよ)

エル・ナー・ラファ・ナー・ラー (אל נה רפא נה לה 癒したまえ)

エル・ナー・ラファ・ナー・ラー (אל נה רפא נה לה 癒したまえ)

エル・ナー・ラファ・ナー・ラー (אל נה רפא נה לה 癒したまえ)」

手を乾燥させたあと、バージン・オリーブ油を花びらで掬い、まぶたの外端、鼻梁、唇、耳たぶを軽く叩く。

「火を紡ぐ神秘をオリーブ油がもたらすごとく、

わが内なる支配力が水面に浮かびあがり、

火花を發し、わが霊を支えよ」

別の花びらをとり、東を向く。そして四方位の守護大天使を召喚しながら、油を浸した花びらで四方位の風に滴りを落としていく。

「ベ・シェム・ヤー・エロー・ヘイ・イス・ローエル

(בשם יי אלהי ישראל イスラエルの神、主の御名において)

ウミラファナイ・ラーファー・エル

(ומלפני רפאלי わが前にラファエル)

ウー・メイ・アコーライ・ガーブリー・エル

(ומ אחורי גבריאל わが後ろにガブリエル)

ミヤミニー・ミー・カー・エル

(מימיני מיכאל わが右手にミカエル)

ウミシュモーリー・ウリー・エル
(וּמִשְׁמֹרֵי אוּרִיֵּאל わが左手にウリエル)
ヴァール・ロー・シー・シェキナート・エル
(וְעַל רִאשֵׁי שְׂכֵינֹת אֵל)」⁽¹⁸⁾

最後に地面に滴らせ、言う。
「וִיֵּדַעַג לִרְבּ בְּכִרּוֹב הָאָרֶץ 大地の深きから恩寵のあらんことを)」

(18) 四大天使の召喚の文言についてはゲルシオン・ウインクラーと同じものを使用したが、順序と配置をヘルメス学の規範にあわせて修正した。ウインクラーは、右手にミカエル（南）、左手にガブリエル（北）、前にウリエル（東）、後ろにラファエル（西）という伝統的なユダヤの就寝前の祈りを準用している。

Winkler, op.cit., p.143.

SEPHATH EMETH, New York : Hebrew Publishing Company, no date, p.111.

VERBORVM PVBLICA
I ∴ O ∴ S ∴
TRACTATVS MAGICVS SECVNDVS
CANTVS CABBALISTICVS
IMPRIMI POTESST : I ∴ O ∴ S ∴
NIHIL OBSTAT QUOMINVS IMPRIMATVR
IMPRIMATVR : M.E.S.A.5=6
APRILIS MCMXCXVIII

カバラの呪歌 TM 02

Copyrights © All rights reserved I ∴ O ∴ S ∴ 2008

2008年5月5日 I ∴ O ∴ S ∴ 発行

本トラクトは、団員の魔術実践への理解を促進するために作成された。本トラクトを利用した団員の自由な実践活動を妨げるものではないが、会員外の使用については、本トラクトの著作権が秋端勉に属することを配慮されたい。

本文書の内容の一部または全部を、I ∴ O ∴ S ∴ または著作者の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。

表紙画 : J. W. ウォーターハウス 『ユリシーズに盃を捧げるキルケ』 1891年